

作品の向こうに見える、手の育ち

小学部の掲示板は、まさに「芸術の秋」です。

子どもたちが図画工作でつくった作品が、校内を彩っています。

紙をちぎり、形をつくり、貼り合わせる。

一見すると、身近でシンプルな活動です。

しかし、その一つ一つの形に目を向けると、作品づくりの楽しさとともに、子どもたちの「できた」の手前には、手の発達の積み重ねが見えてきます。

子どもの発達には、一般的に、体の中心から手足の先へ、大きな動きから細かな動きへ、と進む方向性があると言われています。

もちろん、発達の仕方や時期には一人一人違いがありますが、こうした身体の動きに関する発達の方向性を知することは、子どもの今の姿を理解し、次の学びを考える手掛かりになります。

手の動きも同じです。

腕全体を大きく動かすことから、物を握ること、親指と人差し指を使ってつまむこと、さらに指先を細かく動かすことへと、手の使い方は広がっていきます。

「ちぎる」という活動にも、両手を協調させる、指先に力を入れる、紙の破れ方を感じて力を加減する、思った形になるように手を動かすなど、さまざまな発達の要素が含まれています。

だからこそ、私たち教員は、「ちぎることができたか」だけでなく、「どのようにちぎっているか」、「どのような動きが育ちつつあるか」に目を向けることが大切です。

紙の端をつまむことが難しい子どもには、つまみやすい大きさや厚さの紙を用意します。

両手を協調させることが難しい子どもには、紙の持ち方や手を動かす方向を工夫します。

指先を使うことに慣れてきた子どもには、粘土など、さまざまな素材や道具に触れる機会をつくります。

子どもの今の姿を捉え、発達を踏まえて次の一歩につながる学習の経験を用意する。

そこに、私たち教員の専門性があります。

ここで、改めて大切にしたいのが、自立活動の指導です。

自立活動では、子ども一人一人の障害による学習上または生活上の困難さを踏まえ、例えば、手指の動きや両手の協調、目と手の協応、力の調整など、調和的な発達の基盤を培うために必要な指導を考えます。

そして、その指導は、自立活動の時間だけで行うものではありません。

作品をつくる楽しさの中で、その子の発達に必要な力を育てる。

図画工作の学びと自立活動の指導を関連付けることは、作品の完成だけでなく、その過程にある子どもの育ちを支えることにつながります。

「やってみたい」、「もっとつくりたい」という意欲を大切にしながら、小学部では、子どもの発達を大切にしたい学習を意識して積み重ねてほしいという思いがあります。

図画工作で完成した作品を見るとき、私たちは色や形、発想の豊かさに目を向けます。

そこに加えて、紙をどのように持ち、指をどう動かし、以前は難しかった動きにどのような変化が見られたのかなど、作品ができあがるまでの過程にも目を向けていきましょう。

作品の中に、その子なりの育ちを見つける視点も大切にしたいものです。

作品の向こう側には、一人一人の発達と学びの積み重ねがあります。

発達を知することは、子どもをより深く理解すること。

発達を踏まえて指導することは、その子の次の一歩を支えること。

校内を彩る作品を眺めながら、子どもたちの表現の豊かさとともに、その一つ一つに込められた育ちにも目を向け、日々の授業づくりに生かしていきたいと思います。



小学部3年生 児童の作品より



中学部3年生 生徒の作品より

やってみよう！ もう一度やってみよう！ 最後までやってみよう！
一歩、二歩、三歩。その先へ

この言葉を大切に、魅力ある虹の原の教育を育んでいきます。
～R8年度 学校経営方針の実現に向けて～